

鷗外『舞姫』の世界

長谷川和子

—

作品主題に対する拭いがたい疑惑という問題は、鷗外文芸の研究が、その肝心において必ず一度はむきあわねばならぬ性質のものである。そしてこのとき疑惑とはほかならぬ、鷗外にとって「近代」とは何であったのかというあの問い合わせと、そのままつらなるものであろう。事実は又、我々のしばしば容易に規定してきた「近代」が、彼の文芸の主題をかえつて覆いつくしてきたかのごとくである。「近代的」さらに「人間的」とは、はたしていかなるものの謂か。作品世界の、そのいわば生命ともいうべきものにかかわって、この問いは、つねに最も切実なる課題を形成してきたといつても、過言ではない。近代化と日本という問題にとりわけ深く関与して、それは、たしかに、一様でない展開を示したものなのであろう⁽¹⁾。

問題をここで、たとえば作品『舞姫』に言い及ぶなら、問い合わせやはり、その作品世界の肝心をめぐつて、ひとつのしかも否定しがたい背理を示している。太田豊太郎は何故かくも見事に、また無様に愛するエリスを捨てうるのか。鷗外とその文芸に亘るほとんどあらゆる事情が検討されてきたのも、つまりはこの一点にかかわってである。だが、

周到な『舞姫』の構成がようやく形あらしめた作品世界のまさしく意味について、そうした試みはなにほどを応えるのである。一見あきらかな説明の数かずが、謎をたたえた作品の光芒に少しく言葉を与えるとくり返しては、いまなおそれを果せずにいる。だれでもない『舞姫』の作者が、明治というあの時代、一人の有能な官吏たるべくこの世界を生きた人間だったということ。エリス来朝事件という、現実に存在した出来事の重み。くわうるに、それと関連して書き残される種々の取沙汰。おそるべくは、これら諸事情と作品との微妙かつ厳然たる距離が、ひとたびは忘れられたもののごとく取りあつかわれ、ときには、全く過不足のないものとして首肯されてゆくということ。現実にそれと明証される苦悩を超えた『舞姫』そのものの主題の考察⁽²⁾が、あらためて厳しく志向されるゆえんである。

そしていま、かりにいいきるなら、『舞姫』とは、そこに、あるひとつつの確たる苦悩をさし示さんとするものなのである。たとえば強引な状況設定、あるいは人物造型上の亀裂など、それと名ざされるいくつかの矛盾破綻をあえておかしつつ、一方、そのようなみせかけを貫くことのうちに、はじめて示しうる底の苦悩。もとより語りがたいことを、しかもなお語るという、その作品世界の前提もまた、こうした苦悩のあり様と無縁なものではなかろう。文体の清新をもつて名高い冒頭の一行は、かくして次のように書きおこされている。

石炭をば早や積み果てつ。

これはそして、すべてを失った人間のみつめる光景であるのだ。単に語られるにはあまりにも深い人間の心情といふものによりそつて、かかるものこそ、鷗外の表現なのである。鷗外文芸にあって、あるいは最も生彩ある特質ともいすべきか。描写は続いて、

げに東に還る今のは、西に航せし昔の我ならず

愛するもののない世界へと、主人公は帰り來たるのである。さらにいえば、深い哀惜や、いやしがたい痛恨の情とはあくまで別に、帰り來たるということにおいて、作品は、なにもまして見事に完結している。思えば、漱石の『道草』に先だつこと二十五年。「帰つて来」た男の物語は、鷗外によつて、いまひとつ全く様相を異にした世界を、ここに開示せんとするのである⁽³⁾。

註(1) 鷗外の作品世界に、いわゆる封建的、非近代的諸性格をよみとることは、むしろ容易である。たとえば、一般に云う近代的モラリズムの尺度によつて、作品『輿津跡五右衛門の遺書』の主題が、そのまま封建的モラルの是認となり、一方『阿部一族』が、そのあきらかな対比として把握されまたた実情にも、このことは顕著といえよう。したがつて、こうした問題の方向を、それ自体どのようにとらえてゆくかがあらためて重要な選択となるのである。

(2)

水谷昭夫「『舞姫』の文芸史的意義」国語と国文学 昭和三十六年一月所収。

(3) 健三が「遠い所から帰つて来」た男であることの意義は、今日の『道草』論にあつて、ほとんど、ひとつつの主題を形成するばかりの関心事である。『舞姫』における豊太郎のそれを、全く同質のものとして把握することには、問題があろう。ただ鷗外も又、このようにしてやはり「帰つて来」た男の物語を書き残したこと、しかも彼が、それを生涯の処女作としたことに、我々は多少とも注目すべきではなかろうか。作品論の範疇からはいま少し広範な視野において、それは、あきらかに、ひとつ重要な課題となるものであろう。

二

「恋愛と功名との相関」こそ『舞姫』の「主眼」だと指摘してやまぬ石橋忍月⁽⁴⁾が、かたや「無用の文字」とまで断案した主人公豊太郎の履歴。作品世界の回想はしかし、その六十余行をもつてはじめられている。世界を受容するあり方において、この両者の差違は、すでに決定的なものを示していたといえよう。回想は次いで新大都ベルリンの

青春を綴る。「あだなる美観に心をば動きの誓ありて、つねに我を襲ふ外物を遮り留めたりき」と語られる彼は「模倣たる功名の念と、検束に慣れたる勉強力」とをもつて、ほかならぬその「外物」の核心、「独立の思想」へとひきよせられる。「奥深く潜みたりしまことの我」は、そしてこの豊太郎の中に自覚されてゆくのである。ただ作品は同時に、これと対照的な「本性」をも彼に賦与している。「わが心はかの合歓といふ木の葉に似て、物触れば縮みて避けんとす」いわゆる「弱くふびんなる心」の存在である。豊太郎にもたらされる悲劇の発端として、この内部の分裂を考えられるのは、十川信介氏の次の御指摘である。

仮面をつけさせる力は、同時にそれをひきはがす力でもあつた。この「自由」の国において、彼の「本性」たる弱性の作用は二重である。

つまり、「まことの我」と「弱くふびんなる心」は、ふたつながらにして豊太郎のものなのである。これをかりに矛盾として速断するなら、作品世界の構想そのものが、大きく揺らぐこととなろう。自我の絶対性を問うような方向から、作品はむしろ、慎重に退くのである。ここにあらためていうまでもなく、近代的自我の覚醒と挫折とは、近代の文芸作品にとって、ひとつのも有効な構図であった。作中太田豊太郎の「まことの我」をめぐって、『舞姫』論の現実も又、この例外ではない。そこでは、「近代的」なる言葉に呪縛されるのあまり、作品の現に語る内実が見失われるということさえ、おこりえたのであった。充分留意せねばなるまい。それと知れるばかりの「近代」あるいは「自我」をのみみてとろうとする精神の前に、『舞姫』は決してその全容をあかそうとはせぬのである。作品にたしかえるなら、そしてこの彼の眼前に、一人の少女はあらわれるのである。

この青く清らにて物問ひたげに愁を含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に掩はれたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深き我心の底までは徹したるか。

出逢いはあくまで偶然なのだと、物語はそのように告げている。豊太郎の「弱くふびんなる心」は、ここでも又、依然かわらぬ姿を示すのである。「憐憫の情に打ち勝たれて」「覚えず側に倚」った彼は、「わが大膽なるに呆れたり」とある。それにしても、意志や決断というもののからはるかにへだたつて、出逢いはこのとき、比類のない美しさの中に書きとどめられている。人が、またなきものと出逢い、愛をしり、やがてひきさかれてゆく、その悲哀の厳しさが、はじめて書きうる美しさである。愛するとは、すでにそれだけで哀しい。人はしかも、こころ狂うばかりにして、その愛というものをのぞみみようとするのである。「師弟の交り」にすぎなかつた可憐の二人が、免官と母の死という二つの不幸な契機を境に、やがて決定的な敗局へといざなわれてゆく作品の展開にも、又単純にみのがせないものがある。母の死の意味が、ここではとりわけ問題であろう。「豊太郎の矛盾が激化してゆくにつれて、ただ一人のその母をも死なせてしまう」という作者の配慮⁽¹⁾に、巧妙な選択の回避をよみとられるのは、たとえば猪野謙一氏をはじめとする、大方の見解である。母の死が作品の展開にもたらす結果をのみいうなら、すでに反論の余地はない。母の死によって、日本への帰国は断念され、しかもそれはたしかに、「エリスを捨てるか母を捨てるか」という形での二者択一をまねがれること⁽²⁾に成功しているのである。ただ、ひるがえつてこのとき、見事に忘れられたものがある。人がその母の死にむきあうことの、かぎりなく深い嘆きである。

余は母の書中の言をこゝに反覆するに堪へず。涙の迫り来て筆の運を妨ぐなればなり。

とかえすべくもない事態への、つきせぬ悲嘆の数行。たとえ、母の死が解放を意味し、さらには、選択にかかる責任を回避せしめたとしても、もはやそれは、单なるひとつ結果にとどまるであろう。いかように辻褄のあう収束をとげようとも、決して再び贖えぬものを代償にして、ことは進展していくのである。自己弁護の色彩をおびて、あるときは醜惡卑劣の非難さえ甘受してきた『舞姫』の作品世界が、実は、かかる悲嘆をみつめていたということ、

考慮のすべきであろう。

一連の偶然をさして、巧妙かつ強引な設定だとする指摘は、もとより妥当でなくもないが、ことの成行きをあくまでそのように描くことのうちに、ひそかにそして着実に獲得されていった問題の傾向こそ、さらに重要ではあるまい。偶然が、やがて事態にもたらすあまりの重大さ。豊太郎にあって、それはまずどのような形のものとしてあらわれるのでか。又、そのとき、悲劇とはだれのいかなる意味におけるそれとして形成されるのか。『舞姫』の主題にかかるわって、最も重要な問い合わせの所在である。

註(1) 氣取半之丞(石橋忍月)「舞姫」日本近代文学大系57『近代評論集I』所収 昭和四十七年九月 角川書店。

(2) 十川信介「太田豊太郎の憂鬱—うしろめたさについて」文学 昭和四十七年十一月所収。

(3) 猪野謙二「日本の近代化と文学」岩波講座「文学」4 昭和二十九年一月所収。

(4) 三好行雄「補注」日本近代文学大系11『森鷗外集I』所収 昭和四十九年九月 角川書店。

II

明確には決して自覚されようとせぬ豊太郎の背信が、ついにエリス発狂となつて、作品世界の現実にたちあらわれるその時まで、『舞姫』の世界がそこにたゞひたすら描かんとするのは、「低絶脚蹠」の主人公である。たとえば、「嗚呼、さらぬだに覚束なきは我身の行末なるに、若し真なりせばいかにせまし」という、エリス懷妊に動搖した彼の言葉をもつて、そこに愛するものの不実を指摘することは、あまりにも容易なのである。問題はしかし、これが、ことのすべてではないという点であろう。即ち、作中太田豊太郎にあって、エリスへの愛は、最後までまぎれもない真実であるということ、我々はここに、作品『舞姫』の、いわば動かぬ一点を認めなければならない。したがつて、

彼における愛の質が、たとえいかように問われようとも、それはすでに問題の肝心とはなりえないものである⁽¹⁾。同様の関心のうちに、たとえば「我学問は荒みぬ」という豊太郎の呻吟をとらえて、作家自身の発想にその主たる原因を求められたのは谷沢永一氏⁽²⁾であるが、こうした問題の把握そのものが、実は、問われるべきであろう。くりかえしいう。彼の愛したこと、苦しんだこと、そして、彼のついに決意しなかつたこと、いずれもが、『舞姫』にあつては真実である。我々がただこもなげに悲劇とよびなして、その安易な概念規定に半ば安住しているとき、鷗外の試みは、はるかに遠くをのぞんでいたといえよう。そこに庶機された悲劇の輪郭は、たとえばあらゆる月並の構図をちらつづつ、しかもその常套からたしかにぬきんぐるものだったのである。

作品はそして再び、良友相沢謙吉の出現を促す。「恋愛」か「功名」か、名高い二者択一論の登場は、このときである。

余は守る所を失はじと思ひて、おのれに敵するものには抗抵すれども、友に対して否とはえ对へぬが常なり。

相沢のさしのべた手に応えて、豊太郎が自らを語るこの言葉は、従来多くの非難をあつめてきたものであるが、この時代における倫理的基盤に注目しつつ、たとえば福田準之輔氏は次のごとく把握される。

「世にまた得がたかるべき」「友誼」が人間関係の「義」であり真であると共にそれが「危急存亡」の場に於て遂に真実な愛の根底を枯渇せしめて行く人間存在の場を鷗外は観ていたようである⁽³⁾。

いま豊太郎の行為は、疑いもなくエリスへの背信を意味するのであるが、その彼を動かしたものは、ただ「故郷を憶ふ念と榮達を求むる心」ばかりではない。友の「友誼」に応えるためには、たとえ自らは捨てがたいエリスであろうとも、それを捨てて、しかもそのことを是認してはばからぬ時代を、彼は現に生きていたのである。いわば、時代の要請が、このときエリスを捨てよと、豊太郎に命ずる。

この時、倫理的なものは、屢々近代的概念で云う人間的なるものを疎外する(4)。

明治二十年代の典型的傾向といふものが、作品世界にどれほど鮮烈に息づいているか、又、そこに当然提起されるであろう問題の核心が、この御指摘の中には、はつきりとさし示されている。ただ、とりちがえてはならない。時代の倫理的基盤は、たしかに豊太郎を許すのであるが、そのことにおいて、彼の苦悩はいさきかもとりのぞかれはしないのである。「免すべからぬ罪人」とは、はからずも作中、彼自身の自らを責める言葉であった。そしてこれは、単に作品の矛盾などであろうはずがない。豊太郎にかせられた苦悩の、そのあり様が、ここではむしろ明確に決せられているのである。

讀つてもあがなない切れぬものを、なおもあがなおうとして命を守ることの中に、たとえは神なき贖罪の悲哀が形成されるものであろう(5)。

『阿部一族』にふれて、水谷昭夫氏の御指摘である。『舞姫』をこれと同断に論ずることはひかえるとしても、「神なき贖罪の悲哀」とは、たしかに考慮すべき視点であろう。命を捨てることもせず、又、現実には何一つ失うこともなく帰り来たつた主人公によつて、舞姫の苦悩とは、かくて次のようにもいいかえうるのである。つまり、人を愛さぬことを罪とはせぬ時代と社会に生きつつ、豊太郎はその実相において、まことにその罪を苦しむ、となるのである。自らが恃むもののためには、無意味に死することさえいとわぬ、あの、晩年「歴史小説」の主人公たちのあり方と、それはよき対照を示している。なお附言すれば、自らの信じる愛に拒絶されたエリスが、ためらいもなく狂気に身をさしのべていつた、その成行きにこそ、むしろ後年の主題をおもわせるものがありはすまい。ただし、『舞姫』は、その悲劇の衷心を、あくまで豊太郎において開示せんとした世界なのである。『舞姫』における悲劇の何であるかについて、少なくとも本筋は、かかる見解にたつものである。

註(1)

『舞姫』における「愛」について考えるとき、まず問題にされるのは、鷗外自身が忍月との論争の中でもらした「太田生は眞の愛を知らず然れども猶真に愛すべき人に逢はむ日には眞に之を愛すべき人物なり」という言葉の真意である。『舞姫』の作品世界が、ともかくも一貫して豊太郎の苦悩をうたうとき、その同じ作者たる鷗外のこの表現に、我々はいつたいどのような理解をもつてすればよいのか。『舞姫』の「近代性」を一方では肯定しながら、そこに「人情本」と通じる恋愛のイメージを指摘する見解が登場したもの、かかる問題の中においてである。ただ、あらゆる影響関係とそのかなりな妥当性にもかかわらず、「愛」の「近代的」であるか「人情本的」であるか、そのような規定というものが、はたしてどこまで問題の核心に関与するものであるのか。つまり、それは、本来根源的な、「愛」というもののあり方自体によるのである。いつ、いかなる場においても、その性格の規定をもつて、「愛」の存在そのものが問われるなどということは、おこりえぬのである。

- (2) 谷沢永一「森鷗外『舞姫』の発想」国文学（関西大学国文学会）昭和三十一年七月所収。
(3) 福田準之輔「鷗外初期三部作の世界」日本文艺研究 昭和三十一年三月所収。
(4) 水谷昭夫 前掲書。

(5) 水谷昭夫「藤村の思想」伊東一夫編『島崎藤村—課題と展望』所収 昭和五十四年十一月 明治書院 もつとも、氏は論中、「漱石の『こゝる』をもふくめて、鷗外の『遺書』や藤村の渡仏まで、この時代に期せずしておこったすぐれた精神の傾向を、すべて神なき贖罪という見方でとらえること」には、「多くの問題がとりのこされる」と御指摘である。

四

近代的自我史観をはじめとして、その他、近代文芸を論じる上での多少とも公理的な図式から、『舞姫』論はいまようやく、ときはなたれようとしている。『舞姫』の悲劇はあくまで豊太郎においてとらえられるべきだとは、論中すでに先述したところであるが、ここではいよいよ、この問題について論究するものである。このとき、豊太郎に於ける苦悩の実相が問われるのはいうまでもないが、本攷ではさらに、エリス発狂の意味についても言及しておきたい

と思う。『舞姫』の悲劇とは、はたして何か。

たとえば作中、相沢謙吉のさりげないひと言。

人を薦むるは先づ其能を示すに若かず。これを示して伯の信用を求めよ。

エリスとの訣別を豊太郎に迫る彼の、その「依然たる快活の気象」が、ためらいもなく語らせた言葉である。人間の技術や才能が、かくばかり力強く信じられたのは、この時代の特徴であろう。

縱令彼に誠ありとも、縱令情交は深くなりぬとも、人材を知りてのこひにあらず（中略）意を決して断て

その同じ人間の魂については、これを無惨にもきりしてていったのである。後年『阿部一族』においては、主君忠利の中に、むしろ人間としてのくらきをみぬいた作家のその同じ眼ざしが、ここではあたかも閉じられたごとくなのである（注）。「人間はそうしたものではない」という、あの九郎右衛門の、あるいは鷗外文芸全体の深みに共鳴してゆくようないと言が、つまり豊太郎の胸には響くことがない。従来突然にすぎるとされてきたエリス発狂ではあるが、かかる視点をもふくめていま一度考え方をわせるなら、ことは意外にも明らかな経過を示している。即ち、豊太郎が相沢のくらきをみぬかなかつたそのことにおいて、エリス発狂はやむおえぬことではなかつたか。いいかえれば、作品展開の最も深い必然において、このとき事態はすでに約束されたものであつたのだ。名高い忍月との論争にあつては、終始豊太郎を「弱性の人」と主張してやまず、したがつてエリス発狂もそのための「僥倖」だといきつた鷗外の真意が、いやがうえにも想起されるところである。母の死におけると同様の展開が、ここには認められるのであり、それ以上の意図については、鷗外はこれを固く拒んでいるのである。『舞姫』はそして、この「僥倖」の名のもと、あたかもすべてがなかつたごとく帰り来る豊太郎の上に、文字どおりその主題を結実せんとするらしい。

され、偶然、あるいはかりに人間の運命とでもいうようなもの、およそ人間の力によつては計りがたい、または

変えがたいものに対し、鷗外文芸がつねに深い関心をよせ、さらにはそこに、きわめて固有のすぐれた主題を形成していくこと、ここにあらためてくりかえすまでもない。『舞姫』の主人公にみられる悲劇も又、たしかに、この問い合わせと離れては存在しないものである。このとき偶然は、たとえば次のごとく説明されよう。豊太郎は自らの担うべき偶然の結果をエリスに負わせ、しかもそのことによつて彼女を決定的に失う。いかに「千行の涙を濺ぐ」とも、「惨痛」のやむことはない。ついに一度も決意することのなかつた彼が、それはひきうけるほかない帰結なのである。そして、エリス発狂をきえ、すべて「僥倖のみ」といきつた、その冷徹な作者の言葉の中に、あらためてかかる事態の意味を問い合わせなおすなら、悲劇はまさにこのとき、その衷心をあらわなものとするのだ。即ち生きること、それ自体が、いまは豊太郎におけるひとつの「僥倖」なのだと云う。さらに作品は、この悲惨をも、彼にすんで耐えよと云う。

傷心の惨痛をそれはむしろ持続することによって超えようとする⁽²⁾。

「明治の抒情」との御指摘がすでにある。あきらかであろう。見事にエリスを捨てえた『舞姫』の作品世界は、しかしそのいわば是非もない非情を、決して許さぬのである。良友相沢謙吉への、あの無様な怨嗟の一行は、実に、そうした豊太郎をさらに責めるためのものであつたやもしれぬ。人間の情熱や苦悩というものが、ほとんどひとつ典型的を形づくりながら、あますところなくみつめられた世界といえよう。鷗外文芸が、『舞姫』をもつて開示した、その「近代」の意義について、以上たしかめたごとくである。

註(1) 摂稿「阿部一族」の世界 日本文芸学 昭和五十三年十一月所収。
(2) 水谷昭夫「舞姫」の文芸史的意義 前掲書。